

---

# 先生は12歳

柿衛門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

先生は12歳

### 【Nコード】

N1071Z

### 【作者名】

柿衛門

### 【あらすじ】

女子高生と家庭教師の恋愛話。……え、先生？ ってどう見ても子供なんだけど？ 12歳！？ フザケンナ！ ぎゃふんって言わせてやる！ そんな16歳の生徒が可愛くて仕方ない12歳のセクハラ先生との攻防。ある意味ファンタジーです？ 以前、ムーンライト様に掲載していたお話の改定版＋指定年齢引き下げ版です。タイトルも変えています。

## 自爆作戦 1

「で？　これは一体何の真似？」

椅子に座っている少年は目の前で正座をしている少女の頭に乗せてぐりぐりしている。

少年は手に持った紙を眺めている。

「せ、先週の小テストの結果です？」

少女は冷や汗を垂らしながらなんとか返事をした。

「なるほど……」

少年は変声期前の綺麗な済んだ声は至って穏やかだ。

だが、その様子とは裏腹の少年の黒い威圧感に少女は更に身を縮ませている。

「ふうん、君の頭は僕の足を乗せる台くらいにしか役に立たない訳か」

少女の頭に乗せた足を遠慮なくぐりぐりしている。

少年の手の中の、少女のテスト結果は惨憺たる物だった。  
全教科11点。

今日、少女がテスト結果を少年に見せたとき何故か少女がニヤッと微笑んだのを見逃さなかった。

わざとこついう点を取ってきたのだろつ。

少年はその状況を逆手に取り少女を甚振って遊ぶことにした。

\*\*\*

少年の名は水原タツキ。

2ヶ月前からこの少女の家庭教師をしている。

12歳にしてとある軍需企業で研究開発責任者という地位に就いている。

モンスター少年だ。

その企業の取引先の課長の娘さんが高校入学と同時に成績が下がった、という事で頼み込まれた。

タツキにも思うところがあつたため、快く引き受けることにした。

授業は週に2回。水曜と金曜。

授業初日。

16歳になるこの少女、飯田カリンはあからさまに少年を睨みつけながら「12歳であたしより頭良いんだスゴイ、天才つてヤツ？」と半分、バカにしたように賞賛した。

タツキにとって『天才』と言われるのが最も我慢ならない事だ。

まるで、何も努力せずに伸び上がったようじゃないか。

それを言う人間は自分の努力が足りない事を棚に上げてるだけじゃないのか？

彼にとって『天才』という言葉は彼の努力や苦勞を認めない最大の侮辱発言である。

「僕は何事も手を抜かず全力でやってきた。その結果だ。天に与えられた物じゃない」

冷めた声でそうカリンに告げた。

「ごめんなさい」

意外な事に彼女は決まり悪そうに、素直に謝った。  
こういう反応は初めて見た。

「いや、謝る必要はない」

カリンの素直な様子にタツキは声を和らげた。

カリンはよく言えば素直、悪く言えば単純で思った事をすぐ口に出してしまう。

この日もそうだった。

\*\*\*

家庭教師が12歳だなんてあり得なくなくなえ？

何が悲しゅうて自分より4歳も下のガキンちよに勉強してもらわなきゃなんないんだか。

お父さんもお父さんだよ。

こんな子供に米搗きバツタみたいにくぺこぺこして、お母さんまで釣られてくぺこぺこして。

そりゃあ、頭良いのは認めるけど……。

大人のプライド？ないのかな？

それに、この子何がム力つくって……。

可愛いんだよ！女子のあたしが嫉妬するくらい綺麗なの。ずるいつて。

思わず見惚れた自分にム力つく！

初日に失言して悪かったと思うけど、何かっていうと説教し始める。「ちゃんとした日本語で話せ」とか「服はちゃんと着ろ」とか「スカートの短い」とか「ごハン粒ほっぺに付いてる」とか「唇がカサついてるよ？」リップ塗つとけば？」とか……

アレ？リップは良いのか。ご飯粒も……？

恥ずかちーっ！！！！

ええつと。そうそう。とにかく、生意気。全てが大人びていて子供らしくない！

全く子供らしくない！

ええつと。そうそう！

絶対ギャフンって言わせてやる……。

年上のプライドっつーのを見せてくれるわ！

\*\*\*

タツキは、生まれてから殆どの時間を大人の中で過ごしてきたため、

同世代の人間がどういった物か分からず12歳まで成長してきた。

そんな彼は、同年代の人間との人間関係育成が疎かであった事は些か危惧していた。

今回の家庭教師の話は彼にとって同世代と接する良い機会である。

そして、彼にとって初めて長時間接する16歳の少女は衝撃的だった。

普段接している大人とは全く違う未知の生き物。

自分の感情に素直であけっぴろげ。

純粹で自分の感情を隠そうとしない。

生まれて12年目にしてほぼ初めてお目に掛かる驚くべき生き物だ。

周りの大人は目を細めながら大人特有のありとあらゆるドロドロとした感情を隠しながら、いやらしい眼差しを向けてくる。

彼にとってはそれが当然であり、また彼もそういう他人を侮蔑の目で見るのが自然になっていた。

ところが、どうだろう？

この少女は素直な眼差しで自分を見詰めてきた。

「12歳であたしより、頭良いの？ スゴイ！ 天才？」

『天才』という言葉にムツとしてしまったが、それも素直な感想なのだろう。

そして、何とか一泡吹かせようと隠しもせずに必死に立ち向かっている。

社会的に陥れようという汚い大人の企みではなく、純粹に彼を驚か

せようという子供のイタズラ。  
可愛いもんだ。

彼女の行動が全て新鮮で微笑ましい。  
猫が飼い主に爪を立てているようで可愛い。

彼女の少女らしい顔や声、立場も弁えず立ち向かってくる態度に心  
拍数が上がる。  
妙に気分が高揚する。

彼女に恋をするまで時間はいらなかった。



## 自爆作戦 2

色々な女性と付き合ってきたけどこんなに楽しいのは初めてだよ。

まさか女相手に本気になるなんて思いもしなかった。  
それも、16歳の小娘相手にね。

今まで食い散らかしてきた大人の女とは違う。

虐めれば剥きになって齒向かってくるし、ちょっと褒めればやつぱり剥きになって「子供に褒められても嬉しくない」と言いつつ顔を赤らめて照れるのが分かる。

ホント、可愛いよ。

\*

そして彼が大人顔負けの態度でカリンを虐めるのは、アレ。

好きな子の髪の毛を引っ張ったり、小突いたりスカートを捲ってしまう思春期特有のアレ。

……ではない。

もとの嗜虐性向が16歳の少女を相手にして一気に開花してしまった。  
った。

照れなどではなく、自分の嗜好を確信した上での所業なのだ。

\*\*\*

そして、カリンには成す術もなく二か月が過ぎた。

最近は別にいつか、と思う事も度々ある。

ただギャフンと言わせてみたいだけで、先生の事が嫌いな訳ではない。

たまにドス黒い気を発しているが（彼女を手籠めにしてどうしよう  
と想像している時）、大抵は穏やかで優しく楽しい。

顔可愛いし。

差し入れくれるし。

こうやって、カリンは丸め込まれつつあった。

だが、そんなある日の小テスト前、カリンは奇策を閃いた。

自爆テロ作戦。

次の小テストで悪い点取れば良いんだよ。

高い授業料払ってるのに成績下がりましたー！ ギャフン！ って。

ひゃっほーうい！

ザマーミロってなスンポーよ。

あたしすげー！！

はつきり言わなくてもカリンはバカだ。

相手にギャフンと言わせたいばかりに自分もダメージを食うことを厭わない。

寧ろ自分へのダメージしかない事に気付いていない。

暫くぶりに晴れやかな気分で戦いに臨む彼女は、問題を見て愕然として震えが止まらなかった。

簡単な問題ばっか！

簡単すぎなくね？

問題間違つて作ったの！？

……いや……私の脳みそが……進化してしまったんだ。  
恐るべし12歳……。

気をシツカリ持つのよ！ カリン！

ここで良い点とつたらアイツをギャフンと言わせられないわ！

だめよ！ 勝手に手が動くわ！

そんな簡単に問題を解いちゃだめよ！

ああ、先生の喜ぶ顔が臉に浮かぶわ……。

ダメ！ 心を鬼にするのよ！

テスト中に心の中で三文芝居をする余裕がある時点でタツキの教えっぷりが如何に見事分かる。

そして、小テストとは言え追試がある事をすっかり忘れている彼女は心底バカだ。

\*\*\*

さあ、お待ちかね。

意気揚々と11点の答案をタツキに提出。

さあ、来い！ ギヤフンと言え！

「……ちよつとそこに座ろうか」

あれ？

ギヤフンって言わないの？

「は、はい？」

カリンがちよこんと床に座ると、タツキはカリンの頭に右足を乗せた。

「ちよ、頭に足乗せんなー！」

タツキは面白そうに眼を細めている。

\*\*\*

「で？ どうやってたら全教科11点なんて器用な真似ができるんだい？」

シマッター！ ツメが甘かった。全教科同じ点数はないよ？ あたしのバカ！

「いやあゝ先生の日頃の教えの賜物ですな！」

それを聞いて先生は極上に微笑んだ。

そして笑っているのに何故か黒いオーラが先生を纏っている。

何か、怖い……。

あつ！

そんな天使みたいな笑顔で頭ぐりぐりしないで下さい！

ごめんなさい！

「うう……頭踏むなんて、ヒドいですよう」

「ああ、微笑ましくて。つい」

「微笑ましくて頭踏むってどういう事！？……で、いらっしやいますか？」

「君が僕をギャフンと言わせようと必死になっている事とか。バレバレなんだよ」

アレ？ばれてた？

自爆損ですか？

ひよっとして、あたしはバカですか？

「君は考えている事がすぐに顔に出るから」

ええ！お蔭様で、まだ16歳ですから！

感情のセーブの仕方なんて知りませんともさっ！

箸が転がなくても笑える年頃ですものっ！

「箸が転がっても面白い年頃って聞くけど。ホントに新鮮で可愛いなあ」

.....

「うわぁー！先生きらいー！勉強もキライだー！赤点上等じゃー！！」

こうなりや自棄じゃー！

喰らえ、癩癩攻撃！

なのに、先生は笑いながらダークマターを放っている。  
マジ、怖い。

「先生からダークマターが……」

「は、暗黒物質？肉眼で見えるわけないじゃん。可愛い上にバカだねえカリンは。あっははははは！」

「うがぁーつつっ！」

飛び掛かったのに

「イテッ！」

先生が避けるから床に激突したよ。

「何で避けるんですか！？」

「普通は避けるでしょ、大丈夫？」

笑いながら先生はしゃがむと、頭を撫でながら顔を覗き込んで来た。

「ちょっと両手出して?」

無邪気な声を出しても誤魔化されるもんか!

「イヤなこつてす!」

「えゝ折角面白い物見せようと思ったのに……」

む……イカン。

見てはイカン。

この声に騙されて顔を見たら負ける。

「あゝあ、カリンに特別に見せようと思って来たのになあ……」

そんな泣きそうな声出したって騙されないんだから。

「僕の……お父さんの形見、なんだけどなあ……カリンにだけ特別

……」

……。

「……はいどーぞ!」

そんな……お父さんの形見だなんて。

お姉ちゃん泣いちゃうよう……そんな大事なモン。  
いくらでも、見てあげるよ!

「あ、掌じゃなくて、手の甲を上になにして親指くっつけて？」

「よし、任せろ！　こう！？」

力チ

「ん？　何コレ？」

「これはね、中国の拘束器具で……ほら、取れないでしょ？」

黒い箱に両手の親指がはまり抜けない、取れない。

「変わった形見の品ですなあ？」

先生の顔を見上げると。

アレ、何スか？

その悪人面……。

「形見な訳ないだろう。僕の父は健在だあ！　はっはっはっは！」

ぬおおおお！

チクシヨ！　騙された！

つつか、何これ？

取れないんだけど！

「さて、テストの不始末のおしおき、受けてもらおうかな」

え？



頭ぐりぐりで終わりじゃないの？

「頭ぐりぐりで終わりなわけないよ」

てへっ。

「追試でもあんな点数取られたら堪ったもんじゃないからねえ」

「可愛らしい声で耳元で囁かないで下さい！」

「さて、舐めたマネするとどうなるか……体に覚えさせてあげようか」

「ひよっ！ な、なななな、何をするですか？」

「ナニしようかなあ、ふっ、ふふふふ、くっくくくくく」

いやああああ！

怖いよー！

何、この子ー！？

可愛いのに、極悪人面で笑いながら顔、近づけな

アレ？

先生って、誰かに似てる？

誰だっけ？

「むぎゅ……！？」

え……！？

初めてのチュー、が!?

イヤイヤイヤ。気のせい気のせい!

近所の子に「お姉ちゃん大好き」ってチューされたと思えば。

な、ななななナヌ?

又ルツとした……

イヤー!

子供のキス……何て、思えるかー!

「んー! んー! んー!」

「僕を子供だと思って舐めて掛かったバツも受けてもらわないと」

「うつひょおう! 首、舐めちゃダメ!」

「あのねえ。もうちょっと色気のある声出しなよ……」

「先生またまた、ご冗談、おお、うーうーっ。ヤダっ!」

「耳が弱いんだ」

目がマジだ!

ヤバイ!

ヤーらーれーるー!

「緊張してるの? 可愛いね」

ち、ちげーよ！

「ちょっと、やめ……ぐっ……んー！」

大声を出そうとした口にご丁寧にハンカチを突っ込まれた。  
と思ったら先生が押し掛かってきた！

\*\*\*

マウントポジションさえ取ればこっちのものだ。  
カリンはふがふが言いながら涙ぐんでいる。

「ああ……良い顔」

思わずＴシャツを捲った。

カリンの白い肌に白いブラがとても似合ってる。

「思ったより小さいな……可愛い胸だね」

今まで相手にした大人の女とは違う少女の体。

「ふうん……大人と違ってピチピチして弾力あるな……」

カリンは何だか固まっている。

思考が止まって自分の置かれた状況が把握しきれていないんだろう。

「ふがつ……ほげほげ、もがががー！」

僕が胸元に吸い付いた時に漸く我に返った。

怯えてる怯えてる。

ホント、堪らない……。

「今日はこれで許してあげる」

今日は胸元に三つほどキスマークを付けるだけ。  
ん、女にマーキングするなんて初めてだ。

大した子だよ、カリン。

\*\*\*

「これも罰だよ」

そう言って、いつもの倍の課題を出し涼しい顔で帰って行った。

カリンの家を出ると、シルバーの外車が停まっている。  
タツキの送迎車だ。

後部座席に乗り込みシートに華奢な体を沈めた。  
暫く無言だった運転手がタツキの顔をミラー越しに確認して尋ねる。

「何か楽しいことがあったのですね？」

「ん……まあね」

ボディガード兼運転手はタツキと長い付き合いだから分かる。  
物凄く機嫌が良い。

そして、無言でニヤ付いているときのタツキが一番怖い。

## 新しい友達

「そんなに警戒してどうしたの？」

分かっているのにわざと無邪気に問うタツキ。

「あ、あんな事されたら当然です！」

「あんな事って、どんな事？ 僕何かしたっけ？」

「ひど……！ こっちはお風呂に入ったり着替え……ゲフン！」

へえ、お風呂に入ったり、着替えたりする度に胸元の赤い痕を見て  
思い出すんだ。

タツキの目がそう言っている。

「赤くなって可愛いなあ。この前の事でも思い出した？」

「みぎやーっ！」

タツキは、ニヤニヤ笑いながら16才の初々しい反応を堪能している。

この、天使の皮を被ったエロオヤジは、カリンを手箆めにせんと日々企んでいたところ、先日チャンスが舞い込んできた。

向こうから、スノコ巻きになって「さあ！ どうぞ召し上がれ！」と川上から流れて来たもんだ。

今後の楽しみのため全てに手は付けず、最後をどう美味しく頂くかさまざまなシミュレーションを行っている、美少年の皮を被ったヘンタイだ。

\*\*\*

こうなると意地でもギャフンと言わせねば立つ瀬もないし腹の虫も治まらない。

ノド元過ぎればナントヤラ、のカリンは作戦を練っている。だが、下手をすると返り討ちに会う。

「何かないかなあ？」

鼻の下にシャープペンシルを挟め眉をしかめて模索する。  
可愛い顔が台無しだ。

余談だが、そんなカリンを見てトキメク男子が多い。  
可愛いのに飾らなくて、たまにぼんやりと窓を眺める姿に癒されるようだ。

「あの、何を考えているか分からないところが良いよね」

「可愛いのに、気取ってないしな」

などと、ありがたーい目で見られる。  
実際は形振りお構いなしに「あのガキ（タツキ）絶対ギャフンと言わす」事を考えている。

「あゝホント何かないかなあ……」

子供の苦手な物とか嫌いな物ってなんだろう？

ピーマン？ は、あたしも嫌いだしな。

勉強？ は、寧ろあたしが嫌いなんだよ。

コーレイ？ より、怖いもんなあ、あの人。

大体、普通の人間扱いしたらダメなんだよ。  
直接聞こうかなあ。

『はい、先生！ 先生の苦手なものってなんですか？』

『僕に弱点なんかある訳ないだろ？』

ダメだ！

んー！

んー！

んー……

んー……

ぐー

ぐー

「だ。飯田！ 飯田カリン！」

「……はっ」

大声で呼ばれてはっとする。

数学の先生がコワイ顔をして立っている。



「黒板の問い5やってみろ！」

わぁーい、怒ってるー。

皆、固唾を飲んで見守っている。

数学の多田は全生徒から恐れられている学年主任＋生徒指導。

目を付けられると厄介だ。

誰も目を合わせない。

アリガトウ！ 皆！

問い5、問い5。

……先週、タツキ先生に教えてもらったヤツだ。  
はい、スラスラーっと。

「授業中に寝てる割に解けるもんだな」

解いたのが面白くないのか露骨にイヤミを言う教師。

「す、スミマセン先生！ 昨日遅くまで数学の予習していたのでつ  
い……」

カリンは半ベソ擬で返した。

「ん、そうか。でも、授業で寝たら本末転倒だぞ」

教師はちよつとご機嫌になった。

ふいー良かったヨカタ。

タツキ先生のお陰だ！

アリガトウ、先生！

「って、ちがーう!!」

お前の所為（逆恨み）で寝ちゃったんじゃないか！

「何が違うんだ？」

「あつ……その、公式の符号違うかな？　みたいな……」

「お、そうか？　そうだな……うむ、頑張ってるな、飯田」

めでたくカリンは数学教師の数少ないお気に入り生徒の一人になった。

\*\*\*

「あの、飯田さん。この問題の解き方教えてくれるかな？」

「あ！　俺も。俺も良い？」

「俺にも教えてくれ。3サイズも教えてくれ」

「男はひっこんでろ！　あたしにも教えて、子猫ちゃん？」

「拙者にも御指導願う！」

休憩時間に入った途端、喋ったことのない同級生達に囲まれた。

それにしても……このクラスって侍がいたんだあ。  
あとでサイン貰わなきゃ。

\*\*\*

「あんた、ソレ。そんなに嬉しいの？」

「うん、だって侍だよ？ 今時いないんだよ？」

放課後、親友のミズキが「侍」と油性ペンで書かれたTシャツを大事そうに持っているカリンを見て呆れている。

「そして、ソレは何？」

「へ……？ 同じクラスの夏木ユカちゃん」

カリンに「子猫」ちゃんと言った同級生だ。

ミズキも同じクラスだからモチロン知っている。

そして「子猫」ちゃん発言に違わぬ女子好きであることもよく知っている。

「方向同じだから一緒に帰るの。ね！ユカちゃん」

「ねー子猫ちゃん」

ムツとしながらミズキはカリンにチクツてみた。

「カリン、その人ねえ。女子好きで有名なんだよ？」

「ええっ！？ あ、あたしもミズキちゃん好きだから、女子好き！」

ユカがにやつと笑った。

カリンは奥手というか、マイペースというか。

まあ、どっちにしる他人の噂に振り回されるような子ではない。

「良い子だねえ。あんたって子は」

ミズキがカリンの頭をぐりぐりする。

「お主も良い子じゃのう」

お返しにミズキの頭をぐりぐりする。

ユカが面白くなさそうに二人の遣り取りを見ている。

さすが、ミズキはユカとの年季が違う。

\*\*\*

「ユカちゃんの家って結構近かったんだ！」

学校のある赤緑市から3駅の住宅街でカリンとユカは降りた。

「え、カリンの家ってこの辺なの？」

方向は一緒だつて知っていた。駅で見掛けるから。

「うん10分位だよ」

「え？ でも中学とか一緒じゃなかったよね？」

一緒だつたらこんなに可愛い子猫ちゃん見逃す筈ない。

「高校に入る前。今年の3月に引越して来たばかりなの」

「そうだったんだあ。ご近所だねえ」

「この辺友達いないから嬉しいなあ」

「そうね。あ、今度うちにおいでよ。ね？」

「行っても良いの？」

「……行っても良い？」

「行ってもイイ？」

「イってもイイ？」

「ねえユカちゃん……イかせて……」

「あれ、鼻血？ ダイジョブ、ユカちゃん？」

鼻血を吹きながら身をくねらせている友達を白い目で見ることなく  
ポケットティッシュを渡す。

「はい！」

笑顔でティッシュを一枚差し出してくれるカリンを見て

「……オカズ！」

と謎の言葉を残し走り去る友人を「面白い人と友達になったな」と  
満足そうに頷き見送る。

この日のカリンの収穫は大きかった。

嘘泣きを覚えた！

数学教師のお気に入りになった！

侍にサインを貰って握手までして貰った！（一番の収穫）  
新しい友達ヘンタイができた！

先生ギャフンと言わせるネタないじゃんか！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1071z/>

---

先生は12歳

2011年12月5日22時46分発行